

博士論文 要旨

論文名 『貫之集』の基礎的研究

平成二十七年度 文学研究科 北井 佑実子

本論文は、紀貫之の家集『貫之集』の基礎的な問題について論じるものである。

第一章では、今日に伝わる『貫之集』諸本の概要と本文研究史、さらに『貫之集』全体の構成について述べた。一 『貫之集』諸本概要と本文研究史」では、『貫之集』諸本は、近年貴重な新出資料が紹介され、その本文研究が新たな段階を迎えていることを、各諸本の概要、従来の本文研究史とともに確認した。二 『貫之集』の巻の仕立て方、および歌序の相違について」では、『貫之集』第一類本における巻の構成を取り上げた。『貫之集』第一類本は、主に巻の仕立て方により系統が分かれ、同一祖本から派生したと推測出来る。それにも関わらず、諸本間における歌数・巻の仕立て方・歌序の相違が極めて甚だしい。その相違を巻ごと整理・解説し、『貫之集』第一類本が同一祖本より派生したと考えられる根拠を、今一度明らかにした。

第二章では、平成十六年、朝日新聞社の冷泉家時雨亭叢書に紹介された素寂本『貫之集』を取り上げた。新出資料の素寂本は、『貫之集』第一類本の中で新たな一系統として位置付けられる。さらに、その本文には納得出来る異同が多く、注目すべき存在である。そこで、素寂本を視野に入れて『貫之集』を読むと、従来とは異なった解釈が可能となることを指摘した。さらに、歌仙家集本系統の誤りを訂正出来るという面からも、素寂本の重要性を述べた。

第三章では、まず、一 「村雲切にみる『貫之集』の本文」で、伝寂然筆村雲切を取り上げた。平安末期書写の村雲切は、藤原定家が他本によって書き入れを施した定家校訂本である。しからば、定家が加筆訂正を施す以前、本来の村雲切本文は、『貫之集』第一類本においていかなる位置を占めるのか、その検証を試みた。結果、定家が校訂を施す以前、本来の村雲切は、現存『貫

之集』諸本のいずれの系統にも属さない新たな一系統として位置付けられることを明らかにした。二「資経本『貫之集』の位置付け」では、新出資料の資経本『貫之集』を取り上げた。冷泉家に蔵せられる一連の私家集「資経本」「承空本」、両者には直接の書承関係が認められるということが、少なからず報告されている。『貫之集』において、資経本と承空本は同系統であると考えられていたが、他の冷泉家私家集と同様、資経本の写しが承空本であることを指摘した。それを踏まえて、『貫之集』第一類本における資経本の位置付けについても改めて見直した。三「『貫之集』西本願寺本と資経本の共通祖本について」では、西本願寺本と資経本を取り上げた。『貫之集』第一類本の中で、西本願寺本と資経本は、系統こそ異なるが共通の祖本を有している。よって、その共通祖本の本文推測を試みた。その推測が可能になったことにより、『貫之集』第一類本の共通祖本へ通ずる本文に、わずかではあるが迫ることが出来る可能性を指摘した。四「伝慈円筆烏丸殿切『貫之集』の本文系統」は、伝慈円筆烏丸殿切を取り上げた。伝慈円筆烏丸殿切は、従来で言う御所本系統に属する。しかし、平成十四年に、御所本の親本とみられる承空本が冷泉家時雨亭叢書に紹介された。よって、承空本さらに新出断簡一葉も視野に入れ、烏丸殿切の本文系統を再検討した。その結果、烏丸殿切は承空本と同系統であること、さらに同系統でありながら、烏丸殿切が承空本の誤りを訂正出来るということが確認出来た。

最後に、付録として、今日に伝わる『貫之集』の断簡を紹介・解説・翻刻した。紹介する断簡は、伝紀貫之筆自家集切、伝藤原公任筆貫之集切、伝藤原行成筆貫之集切、藤原定家筆貫之集切、伝慈円筆烏丸殿切とする。各断簡の書誌的事項を述べ、さらに本文系統、本文意義を確認した。なお、断簡ごとに図版を一葉ずつ載せた。

(博士論文 要旨 論文名『貫之集』の基礎的研究 平成二十七年 文学研究科 北井 佑実子)